

齋藤 功先生のご逝去を悼む

前号の高橋伸夫先生のあと、今号に齋藤 功先生の追悼文が続くのは、私にとって時代の区切りという感慨が深い。私が1970年に東京教育大学に入学したとき、お二人の先生は地理学教室とともに新進の助手であられた。その後、齋藤先生は秋田大学、お茶の水女子大学で教鞭をとられたのち、筑波大学で長く地誌学分野のリーダーを務められた。その補佐が私の役回りであったので、齋藤先生の学者人生のかなりの部分を身近で見させていただいた。まだアイデア段階の研究課題を多くお持ちであっただけに、早すぎるご逝去が残念でならない。

齋藤先生は、1942（昭和17）年12月6日、群馬県でお生まれになられた。日光例幣使街道の木崎宿に近い農家のご出身である。かつては養蚕の盛んな地域で、また近年では野菜園芸をはじめとして多彩な農業がみられるほか、北関東の工業地域にも近接している。土地や風土に根ざした生業と、遠い地域との交流や地域ネットワークという、齋藤先生が強調された2つの視点はこうした生活環境のもと、実感として育まれたと思わざるを得ない。

東京教育大学の理学部と理学研究科をへて、齋藤先生が助手に着任されたのは1969年5月である。大学紛争の影響で、理学部は1969年度の入学試験を取り止めたため、その年、地理学教室には1年生がいなかった。1970年4月に入学した私たちは、齋藤先生にとって初めて迎える新入生であった。高橋先生が1970年10月からパリ（I）大学に留学なさったためか、学部1年生対象の外書講読で人文地理学部門は齋藤先生が担当された。私にとって、最初から教員として登場された齋藤先生であるが、何となく半分は先輩みたいに感じていた。講座の助手ではなく図書室の助手というお立場で、図書室わきの細長い研究室にうかがうと、本に埋もれた齋藤先生が両足を机にのせてノンビリ本を読んでおられた。

1971年4月に秋田大学教育学部に移られたため、わずか1年でわれわれの前から姿を消されたことになる。しかし、時を同じくして地理学評論に名論文「東京集乳圏における酪農地域の空間構造」（44巻、271-283）が掲載された。学部2年生になったばかりであったが（もしくは、であったために）、この論文の素晴らしさには目を見張った。これほど感心した論文は、正直なところ、その後ひとつもない。2年後の1973年4月に、齋藤先生はお茶の水女子大学文教育学部に転任された。聞くところでは、前述の地理評論文がきっかけで招へいされたという。若造である私が感心しただけでなく、シニアの地理学者もその素晴らしさを認めたわけである。

1973年から1992年までの20年間は、齋藤先生が研究者として順風満帆の日々を過ごされた時期であったように思う。お茶大と教育大は歩いて5分の近間なので、筑波大で再度ご一緒するまでの期間も、時おりブナ帯巡検や勉強会（および飲み会）などで齋藤先生に接する機会があった。1981年以降は筑波大学に移られ、助教授という比較的自由的な立場でご自分の研究をさらに深められた。この20年間の齋藤先生は、日本のブナ帯地域や東南アジアおよび南米の熱帯地域に関して、いわば自由奔放にオリジナルな現地調査を継続されたように見える。また、論文発表にまでいたらないテーマを数多くお持ちで、大きなテーマでいえば「中郊農業」をめぐる議論、小さなテーマでは「野菜のF1品種」や「果物のCA貯蔵」「小中学校の農繁休暇」「軽種馬牧場の立地」など、多彩な研究テーマでフィールドワークを展開された。その豊富なア

アイデアは驚くほどで、私などは感心するばかりであった。この時期の代表作といえば、市川健夫先生との共著『再考日本の森林文化』（1985年、NHK ブックス）であろう。また、筑波大学人文地理学研究に掲載された「日本における夏ダイコン栽培地域の展開とブナ帯」（6号、181 - 212、1882年）も、集乳圏論文とは違った種類の名論文であると思う。

さきほど順風満帆期を1992年までとしたのは、その年に齋藤先生が教授になられたからである。筑波大学の地理学教室は日本最大の規模をもち、必然的に教授である齋藤先生は重い責任を負われたわけである。大学院で数多くの修士論文や博士論文を指導され、また日本地理学会で常任委員や常任委員長、会長などの役職を歴任されたのは、いずれも1992年以降、筑波大学を退職された2006年までの期間である。加えて、この期間には、大学でも地球科学研究科の研究科長として研究科再編構想に参画され、地誌学や人文地理学という従来からの分野のほかに、空間情報科学という新分野の立ち上げに尽力された。また、自然科学類長という他大学の人には説明が難しい役職をこなされたのもこの時期である。自由人という印象が強い齋藤先生には苦痛であろうと傍で思っていたが、先生は与えられた宿命を義理堅く誠実にはたされた。毎年のように出かけられていたブラジル北東部（ノルデステ地方）や、その後のアメリカ合衆国（大平原やカリフォルニア）での現地調査が、あるいは精神安定剤であったかと考えている。

40年以上にわたる先生とのお付き合いで私が最も感銘を受けたことは、齋藤先生の「研究者としての誠実さ」である。先生はご自分の興味関心に対して正直であったと同時に、ご自分の満足レベルに対しても誠実であられた。学術雑誌にはそれぞれ水準があり、水準すれすれでクリアすれば良いという考え方もあるが、齋藤先生はバーのレベルをはるかに超える論文を数多く書かれている。論文発表にまでいたらないテーマがいくつも残ってしまったのは、それらのご自分の納得できるレベルまで熟さなかったためであろう。同じことは、大学院生への論文指導でも感じた点で、先生は単に形式を満たしているだけでは納得されず、一つでも齋藤先生を感心させるオリジナルな調査結果を要求された。考えてみると、なかなか厳しい要求であり、齋藤先生のお弟子さんたちは皆苦勞されたことと同情している。

以上、私が直接見聞きしたことを中心に述べたため、齋藤先生の研究業績や学会活動・社会貢献などで触れずにしまった重要事項があるかもしれない。特にブラジル研究やアメリカ研究については、私の守備範



写真1 日本地理学会会長講演にて
(2006年3月27日)

囲を超えるので、あえて詳しい言及は避けた。他誌の追悼文をご参照いただきたい。しかし、結論として次のように言うことは、大方の賛同が得られるように思う。

齋藤先生は2014（平成26）年3月27日に、71歳でそのご生涯を閉じられた。日本の平均からすれば幾分短い、全体としてみれば、うらやましいような研究者人生を送られたと思う。ご自分の好きなことを好きだけ時間をかけて研究されたのであるから。その研究成果が、他の多くの研究者に賛美されたのであるから。中ぶらりんの研究テーマはまだ沢山残されているかもしれないが、それは豊かなアイデアをもつ研究者の宿命であろう。心からご冥福をお祈り申し上げます。

(手塚 章)